

【論文】

ドストエフスキイと言葉－『白痴』再論

秦 野 一 宏

「ハムレット様、何を読まれておるのです？」－「言葉、言葉、言葉」
(シェークスピア作『ハムレット』第2幕より)

1.

言葉とは不自由なものだ。百万言を費やしても、自分の思いを相手にうまく伝えることができないと覚えることもある。結果的に自分の意図とはかけ離れたことを伝えてしまい、ほぞをかむこともある。人のなにげない言葉の重さに押し潰されるような思いをすることも覚える。

ドストエフスキイの登場人物たちに中にも同じよう思いをいだく者たちがいる。たとえば、『未成年』のアルカージイとヴェルシーロフはともに、「自身の考えを言葉にできない苦しみ」を味わっている¹⁾。『おかしい男の夢』の主人公は、伝道すべきことがあるのに、それを伝える言葉がないことに思い悩む。他人の言葉は手垢に塗れている。人間は「楽園」を作ることができるかと確信し、頭の中にはその楽園のイメージもあるのに、彼には、人々に楽園づくりを促すための「大事な言葉」、自分の言葉が見当たらない。『悪霊』のキリーロフは、「卑劣漢」という言葉を、単なる言葉で終わらせまいとずっと念じて生きてきた。言葉の重さが彼の人生を形づくる。『白痴』のムイシュキンもまた、このような言葉というものの扱いの厄介さ、あるいは不可思議さを十分に承知している。

フェルディシチェンコは、「生涯に一度も何かを盗んだことのないような、正直きわまる人間なんていないように思われる²⁾」が、そうではないかと、ムイシュキンに同意を求める。ムイシュキンは「顔を赤らめ」、「あ

あなたはほんとうのことを言っておられるように思いますが、ただあまりに誇張しすぎているような気がします」と答えた。フェルディシチェンコの言葉の「品のないトーン」をムイシュキンは感じとっている。しかし、ムイシュキン自身、誇張なしで「ほんとうのこと」を伝えることができるのかというと、どうにもところもとない³⁾。ムイシュキンは、自分を「教えるべき思想」をもった「哲学者」だと感じながらも、自分の言葉は無力で「思想」に適合しない。だから自分には人を教え導く権利がないと、考えざるをえなかった。

一方『白痴』には、ムイシュキンとは対照的に、自分の言葉に絶大な自信をもち、それを心底、誇る者もいる。レーベジェフである。「ドストエフスキイの最高の言葉の才人たちは、道化たちである。わけても、散文においてはレーベジェフに才能がある⁴⁾」とある評者は言ったが、宣なるかなだ。レーベジェフには「教えるべき思想」もあるし、実際に彼は、それを雄弁に語ることもできる「哲学者」でもある⁵⁾。

レーベジェフがどんな「哲学者」であるのか、—その一面は物語の第1編ですでにアグラヤによってほのめかされている。

アグラヤは、「牢獄の中でも大いなる生活を見つけ出せる」と真剣に語ったムイシュキンを、こうからかった。「あなたの哲学は、官吏の未亡人で、居候みたいに出入りしているエヴラムピヤ・ニコラエヴナのものと同一ようなものですわね。この方の人生でのすべての問題は、安価ということなのです。ただもう、安く暮らそうとしていて、1コペイカのことばかり話してらっしゃるわ。そのくせ、お金はもってるのよ。彼女はペテン師なの」(51)。アグラヤとムイシュキンはこの時はまだ初対面で、彼女は、ムイシュキンの言葉がまったく気負いのない、率直な言葉であることを信じることはできなかった。しかし、ムイシュキンの「トーン」を聞き違えたとはいえ、彼女の言葉は結果的に、やがて小説の中に現れるもう一人の「哲学者」の出現を先取りしていたのである。レーベジェフはエヴラムピヤ・ニコラエヴナ同様、自分を安全な位置において、自身の〈哲学〉を延々と語る。このペテン師は、創作ノートでは「未成熟の哲学者」と呼ばれていた。

レーベジェフが物語に登場した時は、年のころは40ぐらい、見なりは悪く、書記どころで出世のとまった、赤鼻、にきび面の小役人風情であると紹介されている。ポプリーシチンやアカーキイ・アカーキエヴィチ、ジェーヴシキン、ゴリャートキンといった、いわゆる万年9等官の仲間である。ただレーベジェフは、何でも知っている「物知り先生」であるところが彼らとは違う。何でも知っていると言ってもその中身は、だれそれはどこに勤め、財産はどれくらい、結婚相手はだれで、持参金はいくらいくらといったたぐいのくだらぬことばかりなのだが、興味深いのは、「肘の擦り切れた背広を着ている」ような貧しい「物知り先生」たちが、なぜそのような情報に夢中になるのか、その理由を、語り手が次のように説明していることだ。「彼らの多くは、この一つの学問にも匹敵する知識によって大いに慰められ、自尊心 *самоуважение* と最高度の精神的な満足さえ得ているのである」(8)。その後、「物知り先生」の一人であるレーベジェフは、そのこまごました「物知り」ぶりをいかんなく発揮することになるのだが、同時に、「物知り先生」という類型化の枠を超えたある種「天才的な」人物、「哲学」を語るモンスターとしての新たな側面を見せることになる。ドストエフスキイは『ペテルブルグ年代記』の中で、人は満たされない状態が続くと、何か信じられないようなことに没頭してゆき、最終的には「野心 *амбиция*」のために気が狂ってしまうだろうと述べている⁶⁾ が、おそらくはレーベジェフの場合、知識をひけらかすだけでは自身の「自尊心」あるいは「野心」を満たすことができず、『黙示録』の独自の解釈に基づく「哲学」にのめりこんでいったのだろう。

レーベジェフが作品世界の中で、このように大きな存在になってゆくのは、作者の側からの要請でもあった。ドストエフスキイは「美しい」ムイシュキンに、＜聖なるもの＞と深く関わる「深遠な思想」を語らせたかった。しかしそのような思想を語る言葉はどうしても、大仰な身ぶりをもったものにならざるをえず、そうなれば、ムイシュキンは滑稽な人物で終わってしまう。あるいはそこに身ぶりなどなくとも、何かを真剣に説くだけで、アグラーヤのように、胡散臭い＜教化＞の臭いを嗅ぎつける者もいる。

ドストエフスキイは、このような聴き手の反応を軽く見てプリミティヴ

に考えを語り、＜失敗した＞例を知っていた。『友人との往復書簡抜萃』のゴゴリである。たとえば、1875年から1877年にかけての『作家の日記』の草稿で彼は、ゴゴリの「大言壮語」に触れ、ゴゴリの「謙抑」は「道化の謙抑」であると書き記している⁷⁾。これまで俗悪なもの、醜悪なものを笑いつづけたゴゴリが、自分の笑いは聖なるものまで吹き飛ばしかねないと危惧しはじめ、聖なるものを特別に語ろうとするようになる。言葉を浄化し、その本源に戻すためにゴゴリは喧騒を避け、自身の魂の向上に努めた。自身の魂がさらに向上すれば、読者はその意を汲んでくれると彼は信じ、自身の再教育に勤しんだ。そうすることで、自身にも、日常語から調子を変えた、汚れない「真正ロシア語」を話す権利ができるというわけだ。しかしそのような「真正ロシア語」は、ドストエフスキイからすれば、道化の言葉にしか聞こえなかった。すでに1859年に発表された『ステパンチコヴォ村とその住人』において、ドストエフスキイはフォーマー・オピースキンを通して『往復書簡抜萃』のゴゴリをパロディ化している⁸⁾。『白痴』においても、ドストエフスキイはそのような道化の言葉を話す同種の人物としてレーベジェフを登場させたが、ここでのドストエフスキイの意図は、大仰な「真正ロシア語」そのものを笑うことにあるのではない。ドストエフスキイはここで、道化のレーベジェフと「白痴」のムイシュキンを通して「真正ロシア語」に近いもの、大切な思想を伝達する言葉を積極的に模索している。

大切な思想は、おのずから現れる「本質」と言いかえてもいい。ドストエフスキイはある手紙で『白痴』について述べている。『『白痴』のイデーは、効果ではなく、本質によって把捉されるものの一つです。この本質は意図においてすばらしいのですが、完成されているとまではいえません⁹⁾』と。今、本質的な言説をAと表記する。第4編のエパンチン家の夜会におけるように、癲癇に由来する法悦境のような特異な時間を設定すれば、とりあえずはAを直接、ムイシュキンの口を通して説くことはできる。しかし、それは滑稽であるだけでなく、高踏的で分かりにくくなる可能性がある。たとえば、生前発行されたバリエーションの一つには、自分を侮辱した者をゆるし、少しも侮辱しなかった者もゆるせ、などという難解な＜教え＞も見

られる¹⁰⁾。おそらく、ムイシュキンに節度なく、このような言葉を語らせ続ければ、そこには新たな『往復書簡拔萃』が出来上がることだろう。法悦境にないほとんどの時間では（子どもたちを相手にする場合を除いて）、Aは片言隻句で、もしくは間接的に伝達されるしかない。そこでドストエフスキイは、Aに類似したA'を想定し、そちらについては、たとえば道化の「哲学者」レーベジェフに語らせることにした¹¹⁾。

「意味というものは、つねに協力の成果なのである¹²⁾」とギュスドルフは言った。彼の言わんとするのは、言葉が向けられる人物のことも考慮すべきだということにあるが、ギュスドルフの言葉にはそれ以上の広がりを持たせることができる。ドストエフスキイから見れば、レーベジェフは協力者なのである。

世界の救済、謙抑、誠実さの問題、共苦、ゆるしの思想など、ムイシュキンが深く考えていることはすべて、違った流儀ではあるが、レーベジェフも熟考している。彼は自身の「深遠な思想」を披露するが、その思想はムイシュキンのものとは微妙にずれている。結果的に、似てはいても、AはA'ではないことがニュアンス含みで強調されることになる。そうすれば、読者の想像力は、A'とは似て非なるAに近いものの全貌を自身の中で作り出すことができるだろう。これが、ゴーゴリの轍を踏まないためのドストエフスキイの方法である。

2.

レーベジェフはカーニバル的雰囲気漂うムイシュキンの誕生会で、座興めいた語り口でみんなに自説（「学位論文」）を語る。テーマとなる問いかけは「何が世界を救うか」。

『黙示録』では「生命の源」というのはどういうことになっているのかというイポリートの質問に答え、レーベジェフはまず、「苦^{にが}よもぎ星」が地上に落ちて「生命の源」を濁したという『黙示録』の記述を、「最近数世紀における科学や実面的方面の風潮」と関係づける。彼によれば、「科学的信念」は世界を救えない。それはただ「個人のエゴイズムと物質的必要」を満足させるだけで、それ以上のものではない。世界を救うために必要と

される「道徳的基盤」は、もはや現代にはなくなってしまったけれども、中世には頑として存在した。この自説を論証するために、彼は、中世の人肉嗜食をめぐるグロテスクなアネクドットをもちだす。その内容はこうだ。12世紀には大飢饉が3年に1度くらいあり、そのような状態では人が人を食べるということもあった。そのようなとんでもない人間の一人が老年に近くなって、自分は長い貧乏暮らしの中で、60人のカトリック修道士と「俗人の赤ん坊」を「6個ほどштук шесть」食べた、「進んで」白状した。車裂きの刑や釜ゆで、火炙りが待っていると知りながら、彼は聖職者たちに罪を告白し、自らの身柄を為政者に引き渡した。レーベジェフの「解釈」によれば、この男が自分の恐ろしい刑罰を覚悟してまで自首できたのは、彼には、19世紀にはもはや消え失せた「人の心を拘束し、矯正し、生命の根源を豊かにする思想」があったからだ、ということになる。

この「思想」は一見すると、「良心」や信仰に似ている。実際、イワスクはこれを、「12世紀の後悔した人喰いには『人の心を拘束する思想』があった、すなわち、良心があり、心の中には神があった¹³⁾」と言いかえた。イワスクだけではない。吉村善夫もまた、この「思想」は「すなわち」、「良心ないしは神への畏れ」にほかならないものだと言いかえ、これこそが、その上に人類の生活を築くに足る唯一の「道徳的基盤」であり、「生命の根源」たりうるものだとして結論づけている¹⁴⁾。一方、二人が言いかえたこの「良心」の問題に関してムイシュキンとは別の場面で、次のように語っている。

「まったく度し難い根っからの、人を殺して後悔もしないような殺人者でも、やはり自分が犯罪者であるということを知っているんですね。つまり、後悔などしてないにしろ、自分の良心に照らして悪いことをしたと考えているんですよ。彼らの誰もがそうなんです。(…）ところが、いまエヴゲーニイ・パーヴルイチが話された〔6人殺しの〕連中は腹の中では、自分のことを犯罪者と考えようとしないばかりか、そうする権利があったのだ……いや、自分のしたことは善いことだ……と、まあ、ほとんどそんなふうを考えているんですからねえ。つまり、わたしに言わせれば、この点にこそ恐ろしい相違があるのです」(280、傍点はドストエフスキイによる強調)。

はたしてムイシュキンの言う「良心」は、イワスクや吉村の言う「良心」と同じものだろうか。「人の心を拘束する思想」が「良心」に言い換えられるとすると、ムイシュキンとレーベジェフは結局のところ、同じことを語っていることになるが……。問題はディテールとトーンにある。

ドストエフスキは、レーベジェフの語るストーリーと並行して、ムイシュキンの語られなかったストーリーを対比させている。飢餓の問題も食人の問題も公爵にとっては、座興では済まされない真剣な問題だった。スイスには、岩山の斜面に建てられた城の廃墟があるが、それを見た公爵は、その城を建てた「かわいそうな」家来たちのことを想う。彼らは恐ろしい難業に取り組みながら、同時に税を払ったり、修道士たちを養ったりしなければならなかった。だから、「人喰いがいたということは、しかも大勢いたということは、疑いもなくレーベジェフの言うとおりです」(313)とムイシュキンは言うのだ。彼が言いたいのは、飢餓で追い詰められた「人喰い」の気持ちが分かるということである。そして分かるということは、究極において彼らをゆるすということである。ここまでなら、ムイシュキンとレーベジェフの考えに大差はない。飢餓ゆえに66人の人間を食べたというだけなら、それはまったく公爵の「無類の哲学」あるいは人道的な裁きの物語になる。ただ、どういうわけで修道士が引き合いに出されたのか、それで何を言いたいのか、その点が重要である。修道士を食べたということ、—そのことをイワスクも吉村もまったく問題にしていないが、じつはここにこそ、レーベジェフの論の核心がある。ムイシュキンの「良心」とレーベジェフの「人を拘束する思想」の微妙な意味の差も、まさにこの修道士の問題によって浮き彫りになる。

レーベジェフの弁護する人喰い男は、人を喰ったことに罪を感じているのではない。彼は何より、60人の「修道士」を喰ってしまったことに罪の意識を感じている。「俗人の」赤ん坊は無理して食べただけで、その数が6人に留まった理由を、レーベジェフはこう説明する。「赤ん坊はあまりにも小さくて、つまりその量が大きくないために、一定期間のあいだは俗人の〔この形容詞の奇妙さ！〕赤ん坊は坊さんよりも3倍も5倍も余計に必要なはずですね。諸君、こう考察するにあたって、わたしはもちろ

んこの12世紀の犯人の心情を酌量している〔犯人に同情している〕のであります」(314-315)。いかにもグロテスクで、おぞましい効果を狙った言葉である。ムイシュキン、相手のことを裁こうとすれば、すべてを知る必要がある、あるいは相手の立場に立って考えなければならないと繰り返し述べるが、レーベジェフの言葉は、ムイシュキンの考えをふざけて適用し、ゆるしの思想を實踐しているようにもみえる。

問題は赤ん坊の扱いだ。注意深く読んでみると、男に食べられたこの「6個ほどの」の赤ん坊は、レーベジェフのいう「人を拘束する思想」とほとんど関係がないのだ。「なぜその男は60という数字でやめて、あとは死ぬまでその秘密を守らなかったのでしょうか」とレーベジェフは言う。66ではなく60。彼は、できるだけ罪を軽くするために食べたという赤ん坊の6人を、勘定に入れていないのである。どうやら、「クライアント」も弁護人も、赤ん坊を「6個ほど」食べたことに関しては、「善いこと」とまで考えなかったにしても、犯罪件数に算入する必要がない事例だと見なしていたふしがある。弁護士気どりのレーベジェフは、「クライアント」が「宗教的で、廉恥心がある」ことを立証しようと目論んでいるが、結局、この人喰い男をなにより「拘束していた」のは、「良心」ではなく「聖物冒瀆」への恐怖であり、「宗教的侮蔑の罪」に対する恐怖でしかなかった。さらに言えば、車裂きや釜ゆで、火炙りの刑を上回るこの恐怖は修道士を、わけてもカトリックの修道士を食べてしまったことに対する恐怖でしかなかったのだ。犠牲者が他の宗派のキリスト教徒あるいは仏教徒であったとしても、おそらく俗人の赤ん坊と同じく、犯罪件数には入れられなかっただろう。

作者であるドストエフスキイの側からすれば、何より重要なのは、俗人だの俗人でないだのと限定されないただの赤ん坊である。ムイシュキンも何度か赤ん坊について語るが、彼の見る赤ん坊は、レーベジェフのものとはまったく違う。ある時、ムイシュキンは赤ん坊を抱く一人の百姓女に会った。その女はどうやら生まれてはじめて笑顔を見せたらしいその赤ん坊に、十字を切っている。ムイシュキンがそれを見て、どうしたんだねと尋ねると、彼女はこう答えた。「自分の赤ちゃんが初めて笑うのを見た時の母親の喜びというのは、ちょうど罪びとが神様の前で心の底からお祈りしてい

るのを天上からご覧になる、その度ごとの神様のお喜びと、そっくり同じでございますよ」(183-184)。別の個所の表現を用いると、ムイシュキンにとって赤ん坊は、「神々しい朝焼け」や「育ちゆく一本の草」と並べ賞せられる「すばらしく」「美しい」ものであった¹⁵⁾。ムイシュキンによると、赤ん坊は「基督教の本質のすべて」を示すものである。逆に言うと、殺されても数に入れてもらえない「赤ん坊」の話は、ムイシュキンにとって、「非基督教」の本質を示すものであった。ちなみに、ムイシュキンに言わせれば、その本質が地上の権力、剣にあるカトリックは、「歪められたキリスト」を説く「非基督教教的な信仰」であった（そこにはドストエフスキイのカトリック観が色濃く反映している）。

赤ん坊殺しと言え、『悪霊』の創作ノートにも、飢餓と赤ん坊の関係を論じた個所があるが、そこにはこう記されている。すなわち、基督教（正教）を信じていれば、「赤ん坊を殺すのではなく、己が兄弟のために自分の命を絶つことだってできる¹⁶⁾」と。「生命の根源」となるのは「科学」ではなく、基督教であり、結局のところ、その救いとなるキリスト教を、西欧化した教養人が信じることができるかどうかというのがここでの論点である。飢餓状況の最悪の事態が、「[飢餓のせいで、栄養たっぷりな] 修道士たちのほかに食べられるようなものがいなかった」ことに由来する修道士殺しなのか、あるいはまったくの無邪気な赤ん坊を殺すことなのか、—そこには絶大な差がある。

加えて言えば、レーベジェフの「クライアント」である12世紀の人喰いは、餓えているのは自分だけでなく、赤ん坊も同じであることに気づかない。餓えた赤ん坊を殺して世界は救えない。「子どもは泣きに泣いて、寒さのためにすっかり紫色になった小さなこぶしを丸めながら、むきだしの小さな両手を差し出している」(456)。これはミーチャ（『カラマーズフの兄弟』）の夢の中に現れる餓えた赤ん坊だ。ドストエフスキイは、ミーチャの夢を通して、この泣き叫ぶ赤ん坊（「餓鬼 дитя」）を救うことが世界を救うことであることを象徴的に示している。

結局のところ、人喰いの「人の心を拘束する思想」は「良心」に置き換えることなど、できなかったのである。

レーベジェフの話は、弁護士的どんでん返しとやらで、前菜の用意ができたということが最重要問題であるという仕組まれた滑稽な結論に落ち着くが、この話をムイシュキンとの「協力」という視点から見れば、違った結末になる。ここで異なる結論を持ち出すのは、人喰いの話をさせるきっかけをつくったイポリートである。イポリートはレーベジェフの長広舌が終わると、突然ムイシュキンに向かって揶揄的口調で言う。「公爵、あなたが以前、世界を救うのは『美』だと言ってたっていうのはほんとうですか」(317)。つまりここで、イポリートは彼自身意図せずに、ムイシュキンの重要な思想をレーベジェフの思想に対峙させているのである（イポリートはこの言葉を、仲良くしている「忠実なるコーリャ」から聞き知った。ムイシュキンは子どものコーリャには自身の＜大切な言葉＞を語ることができたのだ）。レーベジェフは、「何が世界を救うか」という大きな問いかけから話を始めたけれど、その答えは、世界を救う手立てはない、である。救いとなったはずの「人の心を拘束する思想」は、彼によれば、過去の思想で、現代においてはもはや存在しえない。またムイシュキンからすれば、それは美しくない。もう一つの語られなかったムイシュキンのストーリーでは（そこでは人は、キリスト教の精神に則り、どんなに犠牲を払っても赤ん坊だけは守り通すだろう）、「美が世界を救う」という結論に行き着くはずである。

ドストエフスキイはレーベジェフではない。ドストエフスキイによれば、「道徳的なもの」はただ、「美の感情」と一致するもの、あるいは「美の感情」を具現化する理想と一致するものだけだ¹⁷⁾。どうやら「人の心を拘束する思想」は道徳的でもないらしい。それは公爵の深い「憐れみ」や「共苦」とは似て非なるものである。「神がなくとも快適に生きていけるが、そんな生活には真の意味が奪われている」というのは「ドストエフスキイの主たるイデーの一つ」かもしれないが、それは、イワスキの考えているようなレーベジェフのイデーではない¹⁸⁾。吉村は、人肉嗜食という人間最大の罪を犯した男の心と弱々しい心をもったロシア民衆を同一視し、レーベジェフの「人の心を拘束する思想」と、民衆を見るには彼らの醜行ではなく、彼らが「常に憧憬している偉大にして神聖なる事物に準拠しな

ければならぬ」(『作家の日記』)というドストエフスキイの思想との共通性を指摘している¹⁹⁾が、これもレーベジェフとドストエフスキイのイデーを同一視することから生まれた誤解である。「人の心を拘束する思想」といい、「良心の痛み」といい、「生命の根源」といい、「道徳的基盤」といい、レーベジェフの意味ありげな言葉はすべて歪められている。ドストエフスキイの側からすれば、レーベジェフの歪んだ言葉は、「美」や「良心」という核となるムイシュキンの語られなかった言葉の周囲を回って、それらを照らし出す役割を担っている。

レーベジェフが言葉を歪めるのは、何より<効果>を見込んでのことである。彼が『黙示録』を15年にわたって講釈してきたのはそこに、おどろおどろしい効果を期待できるからだ。『黙示録』で「たしなめる отчитывать」その効果によって、ちっぽけな自分もえらい人と対等になることができる。レーベジェフは常に、何を語るかということよりも、どのように語るか、人にどのような「効果」を与えうるかを考えている。

だからといって、効果そのものが悪いというわけではない。効果を重要視する考え方そのものは、ムイシュキンとも無縁のものではないのだ。彼は時に「効果」を生み出すことを確信して、あえて「書き方教本」から採ってきたような陳腐な言葉を口にすることさえある。たとえば、盗みを働いたことをどうしても言いだせず、情けない思いで、自分は自分を尊敬したいのだと訴えてきたイヴォルギンに対して、彼はこう慰める。「そのような望みをもつ人は、あらゆる尊敬に値するのです」(403)。迫りくる死を思い、悩み苦しむイポリートに対しても、「人より多く苦しむことができたとすれば、当然その人は、人より多く苦しむ値打ちのある人なんですよ」(432)と、同じような言葉を繰り返す。いかにも安直な言葉で、同種の構文ならいくらでも作れそうだが、これはいわば言葉のモルヒネなのだ。モルヒネは病を治しはできないが、痛みを和らげることはできる。語り手の言葉を用いて言えば、ムイシュキンは、「内容は空虚でも」そのような言葉が追い詰められた立場にある人たちの「魂を捕え、鎮める」ことを本能的に洞察していた(404)。レーベジェフの場合は効果によって利益を得るのは彼自身であるが、ムイシュキンの場合は彼以外の人間である。レー

ベジェフの効果は醜く、ムイシュキンの効果は「美しい」。

「人の心を拘束する思想」に戻ろう。レーベジェフによると、「人の心を拘束する思想」が、人々に「道徳的基盤」を提供した。この「道徳的基盤」については、人喰いの話に至る前段、「人類にパンを運ぶ荷車」との関連で語られている。「人類にパンを運ぶ荷車」は、『未成年』の準備ノートでは、「人はパンのみにて生きるにあらず」というキリストの言葉と結びつけられている²⁰⁾が、レーベジェフの関心はキリストの言葉に則った個々人の精神の救済ではなく、人類全体の物質的福祉に向けられている。彼には「人類にパンを運ぶ荷車」なんて信じられない。「なんとなれば、その行為に対する道徳的基盤もなく全人類にパンを運ぶ荷車は、運ばれてきたパンを味わう喜びから、人類のかなりの部分を、非情にも除外しかねないのだから」(312)。彼は、人喰いの弁護の時と同様、弱者の側に立ち、弱者に同情している。そしてここでは弱者の側から、人間の不平等を指弾している。

このような弱者に同情する姿勢は、彼のマルサス批判にも現れている。人口増加から結論される滅亡から人類を助けるという意味では、マルサスは「人類の友」であるかもしれないが、それは結局のところ、人類の大部分（貧しい人々）の救済を除外するという事にほかならない。除外する側は、理論のようなことを盾にして主張しているが、もしもその者に「道徳的基盤」がないとすれば、このような主張は結局、人類を助けるどころか、滅ぼすものである。実際、レーベジェフによれば、マルサスのような「人類の友」と称する者たちは「道徳的基盤」とは縁のない、ただの「虚栄心」の塊りなのだ。「虚栄心」を叩けば、すぐに復讐にかかり、人類の幸福なぞはどこへやら、彼らは、この世界を焼き払ってしまうだろう。ここまではいい。問題は、ここからの論理の飛躍である。レーベジェフはなんとここで、自分も虚栄心では引けを取らない、つまり、自分にも「道徳的基盤」はないと平然と言い放つのである。そんな無責任なレーベジェフを評して、ケルレルは言った。「啓蒙を攻撃したり、12世紀の残虐行為を是としてみたり、渋い顔をしたりしているけれど、奴には純真な気持ちなんてさらさらしないのさ。あの男自身、どうやってこの家〔別荘〕を手に入れたのか、

聞かせていただきたいものだね」(316)。レーベジェフの考えでは、「道徳的基盤」がないのは、ほかのみんなも同じで、何も自分が例外だというわけではない。平たく言えば、パンが唯一の関心事で虚栄心の塊りである人間というものは、強く拘束しておかないと何をしでかすかわからない、というわけだ。これは、悪魔の忠告に従い、恐怖によって人間を管理する「大審問官」(『カラマーゾフの兄弟』)に近い考え方である。

レーベジェフには責任意識は皆無である。チャーホフの『無名氏の話』のオルローフは、たとえ自分たちが時代に抗することができず、意気消沈してしまったとしても、それは自分たちが悪いのではない。そこには歴史的必然性があるのだと語る。責任逃れの常套的な言い訳だが、少なくとも、オルローフにはやましさがあふれる。レーベジェフにあつては、やましさは微塵もない。それどころか、彼は、責任がないのなら、率先して卑劣な行為を行うと言ってはばからない。自分は卑劣であると感じることは、ムイシュキンにもある。しかし、そんな自分の卑劣さを時代のせい、境遇のせい、運命のせい、人間の本性のせいにするなど、彼にはありえない。ムイシュキンにあつては、自分が卑劣であるという罪の意識は、彼自身を苦しめると同時に、その苦しみそのものが、他の人々の苦しみに透入する＜門＞になる。一方、レーベジェフは、時代が悪いのなら、ちっぽけな「アトム」にすぎない自分など大手を振って、自由に卑劣にふるまえると考えているのだ。自身を「アトム」でしかないと考えるのは、ムイシュキンが「大いなる力」と呼ぶ謙抑 смирениеとは似て非なる卑下である²¹⁾。ニーチェ流に言えば、彼の「道徳」は、怨恨に基づいて価値序列を逆転した「奴隷の道徳」である。レーベジェフはさっさと白旗を上げ、自身の弱さ、卑劣さを誠実に認めたくて、その弱さ、卑劣さを現代人に共通する＜どうしようもないもの＞として肯定する。

しかし、新たな「人の心を拘束する思想」が現れたらどうなるのか。もしも、そのような弱い自分たちの心を恐怖で拘束し、支配してくれる大審問官が現れれば、卑下の権化であるレーベジェフは、唯々諾々として彼に従う以外に手はない。

3.

レーベジェフは自身の弱さ、卑劣さを誠実に認める……。しかしながら、狡猾なレーベジェフの〈誠実さ〉とはいったいどのようなものなのだろう。それはムイシュキンの誠実さとはどう違うのか。

ムイシュキンはレーベジェフのようにうまく演技できない。レーベジェフは「閣下」から、「きみが反キリスト教授というのはほんとうか」と尋ねられると、故意に古語を用いて、厳めしく「Аз есмь我あり（=我輩がその者でござる）」(168)と答えている。いかにも意味ありげな表現だが、そこには、「深遠な思想」に見せるための計算された仰々しい「身ぶり жест」が透けて見える。レーベジェフは相手を効果的に嚇すと同時に、道化芝居を楽しんでいるのだが、こんな器用なことはムイシュキンにはできない。それどころか、彼には、人々があたりまえに身につけている礼儀正しい「身ぶり」もおぼつかない。「自分の思想や重要なイデー」を語ろうとすると、「身ぶり」はぎくしゃくし、何かしら滑稽なものになる。そのことを嘆きながらも、しかし一方で、彼はこうも考える。「誠実さ искренность」は実のところ、「身ぶりと同じだけの価値あるもの」ではないか。誠実さが人を滑稽にするとしても、それを恐れる必要はない。ひょっとすると滑稽であるほうが、人々は「互いに早くゆるしあえるし、早く驕りをすてることができる」(458)のではないか。

ムイシュキンはエパンチン家の夜会に集まった人たちに、自分はどうかすると信じることができなくなるために、卑劣になることがあると誠実に告白する。内容的には、レーベジェフの告白と似ているのだが、ムイシュキンの「誠実さ」はもちろん、レーベジェフのものとは似て非なるものである。

レーベジェフは「誠実さ」という言葉を、自分につごうのいいように狡猾に使う。卑劣な振る舞いをしました、後悔していますと心の底から言ったようにみえても、その言葉は信用できない。創作ノートにはこんなふうに記載されている。「信服し、涙を流し、祈らんばかりにしながら、公爵をだまし、彼を嘲笑する。欺いておいて、ナイーヴに誠実に искренно公爵に恥じる²²⁾」。恥じたかと思うと、また騙しにかかる。この過程は一つのサイクルである。彼には改心というものがなく、たとえあってもそれは瞬

間の、しかも形式的「改心」にすぎない。言葉はどんな言葉であろうと、その瞬間の「誠実さ」の名において否定できる。最終の言葉と見えても、それは「誠実に」訂正され続けるのである。バフチンは「見せかけの最終的な言葉」を作り出す地下室人の言葉を「逃げ道のある言葉」と表現した²³⁾が、レーベジェフの言葉には常に、「誠実さ」という逃げ道が用意されている。たとえ、この前言ったこととの矛盾を指摘されても、しゃあしゃあと、またぞろ正直に自分の＜弱さ＞をあるいは「卑しさ」を持ち出してくるだろう。パターンは変わることがない。感激の言葉を縷々並べ立てたとしても、所詮は「ただ言葉だけのこと」である。彼は、自分の言葉をただの言葉に終わらせたくないと願い、そのことに命すらかけるキリーロフの対蹠人である。

レーベジェフの言葉には芯がなく、その意味するところはあいまいである。彼にとって、嘘とは真実の反意語ではない。たとえば彼はムイシュキンにこんなことを言っている。「言葉も行いも、嘘も真実も、私にはみんないっしょにあって、まったく誠実なものなのです И слова, и дело, и ложь, и правда – всё у меня вместе, и совершенно искренно.」(259)。嘘と真実がいっしょにある、ということは、何が真実なのか分からないということである。共存するはずのないものが共存するということである。この点において彼は、同時に相反する感情を感じることでできるスヴィドリガイロフやスタヴローギン、ヴェルシーロフたちと繋がっている。

創作ノートにあるように、「レーベジェフの中は無秩序」である²⁴⁾。しかし「無秩序」だけでは、さすがのレーベジェフも生きてはいけない。たとえ見せかけであつても、そこには自己を肯定する「無秩序」なりの秩序、自己を肯定する拠りどころがなければならない。それが「誠実さ」である。卑劣であることも、彼は隠しはしない。ムイシュキンと違うのは、「公正を期せば」自分は皆と同じではなく、「誰よりも卑劣」なのだと、公然とってはばからない点にある。レーベジェフの中には卑劣な私と、その卑劣な私を完全な第三者として公正に観察するもう一人の＜私＞が存在する。観察というと聞こえはいいが、この＜私＞はただの傍観者にすぎない。

レーベジェフの「誠実さ」は行動と結びつかない。レーベジェフは、金

を盗んだイヴォルギンが、それを返そうと工作して、彼の気づくところに金を置いているのを知りながら、あえて気づかぬふりをし続け、金を回収しないでいる。この出来事の一部始終を知ったムイシュキンはレーベジェフに、金を盗んだことを恥じ、それを何とか気づかれぬように返そうとしているイヴォルギン將軍は「この上なく、正直な男」であると言った。するとレーベジェフは、そのような「公正な言葉」を口にできるのは、公爵だけだと言う。「いろんな悪徳に腐り果てた私でございますが、そのためにこそ〔公正な言葉ゆえに〕崇拜とっていいくらい、あなたに信服しておるのでございます」(409)。この言葉は彼なりの誠実な言葉であることは疑いないが、こう言ったからといって、その後も、彼の行動が改まるわけではない。彼は、自尊心を辱め続けると、人はどういう反応を見せるのか、それを見て楽しむため（彼に言わせれば「悪気のない好奇心」にそそのかされて）「この上なく、正直な」イヴォルギンをなおも苦しめ続け、結果的に彼を死に追い込む。

いや、レーベジェフはそんなに他人に非情な男ではないと考える評者もいるだろう。実際、レーベジェフは卒中で倒れたイヴォルギン將軍のために「ほとんど素面で」「本物の涙を流し」たのだし、將軍の死んだあとも、遺体をおさめた棺のあとを「泣きながら」ついていったのだから。とはいえ、そのような殊勝な行動だけで、心を入れ換えたとは判断することはできない。イヴォルギン將軍がまだ生死の境をさまよっている時にすでに、レーベジェフが彼を、残酷にも、執拗に「故人」と呼び続けていたことを忘れてはならない。「人間を好きになるには、相手に姿を消してもらわなくちゃならない²⁵⁾」と言ったのはイワン・カラマゾフであるが、レーベジェフもまた、他人のために「誠実な涙」を流すためには、その者にこの世界から姿を消してもらわなければならなかった。だから彼は、魔術的な言葉の力で、生きているイヴォルギンを消したのである。ふざけているわけではない。彼は彼なりに、その時の自己の気持ちを誠心誠意、表そうとしているのだ。しかし、そのような自己への誠実さと「道徳性」は一致しない。

ドストエフスキイはこんなことを言っている。自分の信念に忠実に異端者を焼き殺す者は、誠実で公正であるかもしれないが、けっして道徳的人

間ではない²⁶⁾、と。いかに誠実であっても、そしてたとえ言葉だけであっても、まだ生きている者を死者として扱う者は、けっして道徳的人間とは言えないだろう。

レーベジェフの「誠実さ」はケルレルの誠実さと対比させることで、よりその意味するところが明確になる。ケルレルは、ムイシュキンに「心からの告白」をして自己の向上に努めようと思いつつも、同時にその「告白」をうまく利用して酒代を借りることはできないかと考えた。この二重の考えを彼は「地獄の思想」と呼ぶ。同じくレーベジェフは「後悔の涙」を流しながら、同時に、ここで涙を利用してちょいと「釣ってやろう уловить」というこれまた「地獄の思想」（彼も同じ表現を使った）を抱いた。そして自身の「地獄の思想」を二人ともムイシュキンに、「まるで自慢しているように」露悪的に告白する。このように見てくると、二人の言動はまったく同じようだが、ムイシュキンによれば、二人の告白のトーンに微妙な違いがある。その告白の違いをムイシュキンは次のように表現している。

「しかし彼〔ケルレル〕はあなた〔レーベジェフ〕のものより、もっと誠実だ искреннее、あなたはそれを決定的な職人技 ремесло に変えたのです」(259)。ムイシュキンはレーベジェフにも誠実なところがあることを認めはするが、その誠実さがほとんど形骸化してしまっていることに気づいていた。「職人技」は、何度も繰り返すことで熟練し、難なく使えるようになった技術のことである。レーベジェフの告白、懺悔も、あまりにも繰り返されて、すでに一つの型になってしまっている。「ケルレルもレーベジェフもムイシュキンの信仰的〔『白痴』本文では「人道的」、「スイスの」〕裁断を受けては、その裁断どおり高潔にならざるをえなかった」と吉村は指摘するが(151)、実際はそうはなっていない。ケルレルは告白後はもうムイシュキンを騙そうとすることはないが、レーベジェフはこの告白以前も以後も、繰り返し騙し、そのたびごとに謝罪をしている。のちに、ムイシュキンを禁治産者としてしまおうと画策し、それが失敗に終わった時にも、その画策の内容をムイシュキンに事細かに報告し、懺悔したあとで、あなたへの信服はもう生涯揺るぎないものになった、もう「血を流す」覚悟であると誓う(488)。しかし、この「血を流す」という言葉自体があや

しい。じつは、以前にも祖国という言葉を使う時に、彼は、「全身の血を流す覚悟がある」と言っていた (312)。また、窃盗事件がらみで、ムイシュキンから自分も事件の解決を手伝うと言われた時も、ほとんど意味なく、「全身の血を全部……」という言葉が口をついて出てくる (377)。これはもう、機械仕掛けで出てくるような、慣れ親しんで、擦り切れた誇張の文句なのである。

レーベジェフは「地獄の思想」を告白する前にも、ムイシュキンに心底、忠誠を誓いながら、同時にパヴリーシチェフの息子の事件に関わり、金のために、公爵を中傷する文章を書いた。そしてそのことが露見した時には、レーベジェフは片手を胸にあて、毅然とした態度で、自分が書いたと認める。それに対してリザヴェータ夫人は、「まるで自慢でもしているみたいじゃないの」 (241) と評した。すべては繰り返しである。リザヴェータ夫人が「決してあなたを許さない」と怒りを露わにすると、すぐさま、卑しいことをしたと頭を垂れ、胸を叩く。卑しいと言え、それでゆるされると思っているのだろうけれど、わたしはゆるさないと夫人がさらに追い詰める。するとレーベジェフは、「でも公爵はわたしをゆるしてくださいますよ！」と、「確信と感動を込めて」言った。すべては公爵（あるいは神）において、ゆるされている、あるいはゆるされるだろうと知っているのも、何をしてもかまわないと居直るのがレーベジェフなのだ。ムイシュキンの「無類の哲学」をこのように自身に適用するレーベジェフは、イワンの哲学を自分なりに俗化したスメルジャコフを思い起こさせる。

レーベジェフは、リザヴェータ夫人から卑劣な「人間もどき людишки」と罵倒されてもまるで動じないが、自身の知性や教養が批判されていると感じると、もう黙ってはいられない。彼は、知性や教養に関しては「社交界の皮肉屋」エウゲーニイ・パーヴロヴィチにさえ、引けをとらないと自負している。とはいえ、その自負は、スタヴローギンやヴェルシーロフにおけるような「ヨーロッパ的憂愁」に彩られたものではない。

公爵を中傷した文章のできの悪さを誰かが揶揄した時は、「あの文章でまずいところは（いや、あれは無教養なものですからね！）決してわたしのせいではございません」 (242) と言い訳をする。彼が気になるのは内容

ではなく、あくまで言葉なのである。金が盗まれたと、ムイシュキンに話をした時も、「いやな話ですね」とムイシュキンが言うと、それは「然るべき表現」だと感心し、ことは「深刻だ」とムイシュキンが言うと、事態を表現するよい「言葉」を見つけ出してくれたと感謝する。言葉、言葉、言葉……。『この上なく正直な男』だとか「公正を期せば」とか、あるいは「誠実」ですら、この男にとってはその内容よりもまず、＜高尚な＞響きをもつ＜知性＞あふれる言葉なのである。聞かれもしないフランス語をわざわざ甥っこに解説したり、フランス語の動詞にロシア語ふうの動詞語尾を付けて、奇妙な造語を作ってみせたりするのもみな、自身の知性をひけらかしたいがためであった。

『白痴』の創作ノートに、こんな記述がある。「レーベジェフが不意に尋ねる。『公爵、あなたは どうお考えですか、神は存在するのでしょうか？』²⁷⁾」。神は存在するかという問いかけは、ドストエフスキイの登場人物たちの会話の中によく現れるが、ここでの問題は尋ね方、そのトーンである。ムイシュキンは、問いには直接答えないで、こう返す。「ずいぶん軽々しく尋ねられますね？」。すると、むっとしたのか、レーベジェフはこう答える。—「わたしがこのことでどんなに苦しんでいるか、ご存知でしたらねえ」。

レーベジェフの苦しみはおそらく嘘ではあるまい。彼は誠実に自身の苦悩を語っている。とはいえ、たとえ彼なりに真剣に悩んでいるのだとしても、その言葉を額面通りに受け取るわけにはゆかない。なぜなら、その直後に、彼はこう続けているからだ。「もっともその解決はいつも先へ延ばしています。いろいろと用事が邪魔をしましてね。でも万一のために祈りはしています」。神は存在するかという問いかけは、キリーロフやイワン、ドミートリイたちにとって、自身の全存在に関わる切実なものであった。一方レーベジェフにとって神の有り無しを確定することは、当人の言葉に反して喫緊の要事ではない。日常的な「用事」のために後回しにされる、そんな程度のものである。しかも彼は狡猾にも、自身が不利になるのを避けるため、存在するかしないか分からぬままに、とりあえず祈りを捧げている。どっちに転んでも損はないように、＜逃げ道＞を作っているのである。つまるところ、彼の言葉の誠実さ、真剣さは主観的なもの、括弧

つきのものにならざるを得ない。ムイシュキンとは違う。彼は自身のすべての言葉に責任を負う。ムイシュキンとレーベジェフという二人の「哲学者」を分かち最大の特徴は、おそらくはこの言葉の重さにあるのだろう。

4.

ムイシュキンは、「共苦 *сосрадание*こそ全人類の存在の最も重要な、あるいは唯一の法則である」(192)と考えている。そして、ロゴージンに関しては、彼には「苦悶することも同情を寄せる〔ともに苦しむこと〕こともできる大いなる心」(191)があるとその性格を称揚している。ではレーベジェフには「共苦」できるだけの「心〔=やさしさ〕」があるのか。イヴォルギンを死に追いやった仕打ちを見れば、どうやら、そんなものはないと言いたくなるが、そう言い切ると、レーベジェフの性格の重要な側面が切り捨てられてしまう。

ムイシュキンに言わせれば、ロゴージンほどの大きなものではないにせよ、レーベジェフにも「心」はある。実際、ムイシュキンは、「彼〔レーベジェフ〕の中は多くの無秩序といくつかの特徴がある」けれども、「その中には心 *сердце*がある」(410)と語っているのだ。レーベジェフは、自分以外の人間の苦しみも察することができる。そのような側面があるからこそ、創作ノートにもレーベジェフに向けた、「あなたのことは気に入っていますよ²⁸⁾」というムイシュキンの言葉が残っているのだろう。レーベジェフはフェルディシチェンコやドクトレンコのような、自分のことしか考えられない冷血なエゴイストではないのだ。

たとえば、ギロチンにかけられる死刑囚の恐怖に関して、レーベジェフはムイシュキンと同じように同情を感じる。より正確に言えば、ムイシュキンが感じた同情と似たものを感じる。ムイシュキンはフランスのリヨンで、レグロという男がギロチンによって死刑執行されるのを見た。頭がよく、大胆不敵で屈強なこの中年男が断頭台の上で泣きだす瞬間を回想しながら、彼はこう語る。「確実な死」を前にして、彼はどんなにか恐ろしい思いをしたことか。「彼の魂の痙攣はどれほどのものであったか」(20)。ムイシュキンはこの場面を5度ばかり夢に見たというが、このような他人の

苦に＜透入＞してしまうことがムイシュキンの最大の特徴である²⁹⁾。一方、レーベジェフはデュバリ伯爵夫人の伝記を読み、ギロチンにかけられる夫人の最後の1分間に深く同情することができた。デュバリ夫人はギロチン刑を受ける直前に、もう1分だけ待ってくれと嘆願した。レーベジェフは言う。「この1分間に、主はこの方を赦して下さるのだ。なんとなれば、人間の魂のこれ以上のみじめさは、とても考えることができないのだからな」。夫人の「もう1分だけ」という叫び声のくだりを読む時には、彼は「まるで心臓を鉗子でギュッとはさまれたような気がした」(164)という。

つまるところ、レーベジェフにも、ムイシュキンと同じく他人の苦しみに透入する共苦の能力が備わっているように見える。ムイシュキンがデュバリ夫人の話聞いたあと、レーベジェフがあんな人間だと思わなかったと驚いたのも肯けようというものだ。

しかし、ドストエフスキイが二人に同じギロチンの恐怖を語らせたのは、二人の類似性ではなく、似て非なるものを強調するためなのである。

違いはまず、二人の体験、ひいては言葉の切実さにある。ムイシュキンは実際、その目でギロチン刑が遂行されるのを見た。一方、レーベジェフは見たのではなく、伝記を読んだ。しかも、ほんの4日ほど前「辞典 лексиконで読んだ」だけである。さらに、レーベジェフは、ムイシュキンのようにギロチン刑を受ける直前のすべての人間の苦しみを語っているのではない。フーデリは、「見知らぬ人々のために」祈る点で、レーベジェフをゾシマ長老と同列に扱っている³⁰⁾が、これは当たらない。ムイシュキンの「レグロ」は他の誰にでも置き換えることができるが、レーベジェフの「デュバリ伯爵夫人」はそうはいかない。レーベジェフがデュバリ夫人のことを祈ったのは、彼女が「卑しい身分の出なのに」、のちに女王様に代わって政治をなさったえらいお方であるためだ。売春まがいのことをしてのしあがってきた「偉い罪びと」であるデュバリ夫人、「高貴な奴隷根性」(創作ノート)をもった彼女だから、彼は「卑劣漢」である自身と同一視できたのだ。「すっかり運命の狂った人たち」や「不幸を耐え忍んできた人たち」にも祈りを捧げたといっても、事情は変わらない。どこまで行っても、彼の＜同情＞は、自己中心的なのである。限界があるのだ。だから彼

は、「確実な死」を前にして慄くイポリートの＜苦しみ＞にも無関心で、自殺をにおわす「弁明」を聞いたあとも、自分の持家で、あるいはすぐ近くで自殺を決行されては大迷惑だと、苛立ちを感じるだけだ。死を宣告されたイポリートの疎外感を、スイスで治療し始めたころの自身の疎外感と重ね合わせ、イポリートの味わった苦しみに思いを馳せるムイシュキンとは大違いである。

レーベジェフは、自分さえよければ、それでいいと割り切っているわけでもない。内輪のもの、つまり自分の子どもたちや甥っ子たちのことも彼は気にかけている。実際、レーベジェフは、貧しいやもめ暮らしをしていた彼の妹やその子どもの惨状を見過ごすことはできなかった。甥っ子が赤ん坊の時には、おむつをしたり、たらいで洗ってやったりしたこともあった。二人が病気になった時には、出かけて行って、毎晩まんじりともせず、彼らを看病してやりもした。特徴的なのは、貧しい妹や甥っ子を助けるためなら下の庭番のところから薪を盗んでもいい、貧しい者なら少々の罪は許されると考えていることである。献身(その対象は近親者限定だが)と盗みというふつうなら相容れないものが、奇妙なことに、レーベジェフの中では、まったく違和感なく結びつく。

どうやらこの奇妙さは、レーベジェフが、自己流の悪人正機説のようなものを信じていることからくるらしい。

人喰いもデュバリ夫人も最終的には救われる。どんなに悪どいことをしても、最後には人は救われる。「なんとなれば」、その人は卑劣漢であったから。このような理由づけは一見、マルメラードフの考える救いに通じる。「酔っ払い、弱い者、恥知らず」は、マルメラードフによれば、「ゆるされる価値を持っていないと考えているから、ゆるされる³¹⁾」。賢者は自分の価値を十分に知り、時にはそれを誇っているが、「弱い者」たちは自分たちは心も体も豚そのものだと思っている。だから救われるというのだ。同じようなことは、パウロも言っている。「…神は、知者たちを恥じ入らせるために、この世界の〔もろもろの〕愚かなものを選び出されたのであり、また神は、強いものを恥じ入らせるために、この世界の弱いものを選び出されたのである³²⁾」(「コリント人への第一の手紙」)。おそらく「白痴」

のムイシュキンは、このパウロの文脈どおりに、「愚かもの」、「弱いもの」として、聖なるフールになりうる³³⁾。一方、レーベジェフやマルメラードフは図々しくも、このパウロの文脈を意識的に歪め、愚かさ、弱さを盾にすれば、神の側に付くことができると考える俗なるフールである。

とはいえ、レーベジェフとマルメラードフの間にも違いがある。昔はいざ知らず、今のレーベジェフは家もあり、別荘まで持っていて、どう見ても、マルメラードフのように貧しいとは言えないのである。いつも酔っぱらっているが、彼はマルメラードフのように酒で身をもちくずしているわけでもない。恥知らずであることには間違いないが、どうやらそれだけでは神へのアピール度が低いように思える。そこでレーベジェフは、狡猾にも、貧しさを装えばいい、貧しく、弱々しく見えればいいのだと考えた。だからこそ彼は、ムイシュキンに再会した時、上着なしのチョッキ姿でいたが、すぐさま「穴だらけの燕尾服」に着替えた。亡き妻の喪に服していることを示すためなら、彼の娘が言うように、「仕立ておろしのフロックコート」がすぐそばにあったのだから、それを着ればよかったのだが。

レーベジェフにとっては言葉も、衣服と同じである。彼の考えでは、言葉の魔術的效果によって貧しさ、弱さを装うことができるのである。穴だらけの服に身を包んだレーベジェフは涙をふくために、ポケットからハンケチを出しながら、こう言った。「母なし児たちでございます」(160)。また盗まれた400ルーブルの金については、こうこぼす。「400ルーブルといえば、たくさんの母なし児を抱えつつ、つらい労働によって暮らしを立てている貧しい人間にとっては、けっこうな金額ですからな」(406)。驚くべきことに、彼はそちらの方がみすばらしく見えると思うと、嘘をついて、ルキヤン・チモフェーヴィチという自分の名前を、チモフェイ・ルキヤーノヴィチに変えてしまうこともできる（なぜ嘘をついたのか聞かれると、彼はそれを「自己卑下の気持ちから」だと説明した）。

レーベジェフはさらに、効果的な言葉がいかに人を動かすか、「利益」を生み出すかを知り、人を哀れに見せる雄弁術を披露することそのものに、大きな情熱を感じるようになった。たとえばドクトレンコは、何度も自慢げに繰り返し聞かされたという伯父のレーベジェフの法廷での〈名調子〉

の一部を次のように再現している。「公明正大なる裁判官の皆々さまがたよ。実直なる労働によって生計を立てているあわれな足なしの老人が、最後のひときれのパンを失おうとしている事実を思い起こしていただきたい」(161-162)。レーベジェフは老婆と高利貸の裁判で、勝てば謝礼50ルーブル、負ければ5ルーブルを受けとるという条件の下、高利貸の弁護を引き受けている。裁判官の同情を買うために「あわれな足なしの老人」云々と言っているが、実態は、高利貸の男のほうが、貧しい老婆から500ルーブルをふんだくっているのである³⁴⁾。レーベジェフは、言葉を効果的に使用する技術によって金を稼いでいるのだ³⁵⁾。

言葉はその実体とは無関係に、どんなものでも装わせることができるし、装わせることで利益を引き出すこともできる。アル中で、嘘ばかりつき続けていたイヴォルギンは、「天才」とはほど遠い人物であるが、彼が病に倒れると、レーベジェフは、ご主人は「大天才」でしたとニーナ夫人に語った。「彼は特に、天才であることを真剣に主張してゆずらなかったが、あたかもその瞬間そこから、何か尋常ならざる利益が生まれるかのようであった」(442)。レーベジェフは自分が彼を病に追いやったのだという負い目に苛まれている。言葉はレーベジェフにとって、負い目を拭い去ってくれる特効薬でもある。

レーベジェフは言葉の<名手>である。彼は自身の利益のためなら、どんな言葉でも使いこなすことができる。「美は世界を救う」、「謙抑は大いなる力である」、「共苦こそ全人類の存在の最も重要な、あるいは唯一の法則である」といったムイシュキンの言葉も、レーベジェフならば簡単に、しかも「誠実に」口にすることができるだろう。そこに言葉の恐ろしさがある。しかし、いくらレーベジェフがムイシュキンを真似ようと、レーベジェフの言葉で構築される「哲学」と、ムイシュキンの言葉で構築される「哲学」は、似て非なるものなのだ。

レーベジェフの「哲学」は、真理を解き明かすだけのものではない。彼は、その重要性について、次のように語っている。「哲学は必要なものでございますよ、我々の時代においては、その実践的応用がじつに必要なのでございますが、それは顧みられないので」(405)。この言葉は、自分たちの「奇

妙で不安な時代」にあっては、「だれでも自分なりの不安をもっている」という彼自身の「哲学」を説明したものである。具体的に言えば、こんな時代に、人の不安になど、かまけている暇はないということだ。さらに言えば、イヴォルギンがどんなに悩んでいようと、知ったことかということになる。この卑しい自己中心の「哲学」によってレーベジェフは精神的安定を得ることができる。

ここで興味深いのは、レーベジェフの黙示録の解釈を聞いて彼の髪の毛を引っつかんだという、ナスターシャ・フィリポヴナの怒りである。レーベジェフはムイシュキンに語る。「われわれは三番目の黒馬とともにある、手に衡をもった騎士とともにある」という解釈に彼女は「同意した」。「今の世の中は何もかも衡ではかれ、取引で決められ、すべての人々は、ただもう自分の権利を捜し求めているだけです。『1デナリオンで1コイニクスの小麦、1デナリオンで3コイニクスの大麦』……」(167)。おそらく、ナスターシャはこのような金とモノを交換する売り買いの言葉から、トーツキイから7万5千ルーブルで売りに出され、ロゴージンから10万ルーブルで買われた自身の過去を連想したに違いない（「わたしはいつも売り買いされてきた」(142)）。レーベジェフの講釈はさらにこう続く。「だのに、ここでもさらに、自由な精神とか、純粋な心とか、健康な肉体とか神のすべての贈り物を保ちたい。しかし権利だけではそれらは保たれず、そのあとには青ざめた馬と死というものがやってくるんですよ。そしてその後はもう地獄……。このことに関して行き合って話をし、そして強く効果があったのですよ」(167-168)。

レーベジェフの言う強い「効果」とは何なのか。江川卓によると、「死」は「死神」トーツキイを意味しているという。せっかくロゴージンのものになったのに、再びトーツキイの囲い者になるという預言がナスターシャには我慢できなかったというわけだ³⁶⁾。しかし、ナスターシャという女性は、このような個人的理由だけでレーベジェフにつかみかかるだろうか。ナスターシャは「たとえ自分に無関係でも、そのテーマが真剣なものであれば、ずいぶん熱心になる」(167)という、レーベジェフの「観察」結果もある。ナスターシャはフェルディシチェンコに対し、「怒りで体を震わ

せた」こともあるが、これは、彼女自身が直接侮辱を受けたからではなかった。彼女は、自分のしでかした盗みを他人になすりつけ、そのまま知らんぷりを決めこんだフェルディシチェンコのあまりの「けがらわしさ」に、第三者的立場から、激怒した。

レーベジェフへの怒りの原因はおそらく、彼の示した「けがらわしい」世界観にある。

「あなたはそうに信じているのか」という『黙示録』の解釈をめぐるムイシュキンの問いかけに、レーベジェフは「信じ、解釈している」と答え、次のように続ける。「なんとなれば ибо、自分は素寒貧で、裸ん坊で、人類の流転の中のアトムにすぎません。誰がレーベジェフを敬ってくれますか？ 誰もが彼を嘲り、ことあるごとに足蹴にする。しかし、かくなる解釈においては、わたしもえらい人と対等なんです。知恵ですな！」(168)。

「なんとなれば」という言い回しは、威厳をつけるためにレーベジェフが非常に多用するものであるが、この「なんとなれば」はじつに奇妙である。信じているというのであれば、その内容が正当なものであるからというたぐいの言葉が続くはずなのに、自分はアトムにすぎないなどという突拍子もない自己を卑下する言葉が出てくる。しかしよく考えてみると、「そのように信じているのか」というムイシュキンの問いかけの意味も問題となる。どうやら互いに分かり合っているような観がある。ひと言で言えば、彼の解釈とは、「自由な精神」や「純粋な心」をどんなに人間が願おうと、自分たちの願いとは無関係に、なすすべもなく世界は滅んでしまうということだ。世界の崩壊後には新たな神の世界が訪れる、キリストが再臨するという『黙示録』全体の展望はそこには見られない。

レーベジェフの解釈には嚇しはあっても、救いがない。これと対照的なのは、キリーロフの聖書解釈だ。フェージカは、「哲学者」と尊敬するキリーロフから、「ほんとうの神様」や世界の創造、『黙示録』に出てくる生物や獣の変容について話してもらったことを感謝し、そして同じ話を幾度となく聞かされたにちがいないピョートルに対しては、おまえは「無神論者」で、聞く耳をもたない冷血漢だと非難する。キリーロフは、たとえ、神はいない、世界には救いがないという結論に達したとしても、ならば人々の

ために、自分が率先して世界を救わなければならないと考える一途な人間だ。おそらくその解釈のトーンは温かみのあるものであったに違いない。一方レーベジェフにあっては、世界の救いのなさが彼個人の救いになる。自分はアトムかもしれないが、どっちみち、みんなアトムである自分と同じ運命をたどるのだ、みんな平等に滅びるのだと考えると心が落ち着く。「自由な精神」や「純粋な心」も意味をなくし、世界が地獄になるのであれば、せいっぱい卑劣なことをして、生きている間にいい思いをするに越したことはない、彼は思う（「でも万一のために」お祈りはする）。全人類の破滅こそが、彼の安心をもたらす。おそらくこのこすからい、無責任な退廃的ニヒリズムがナスターシャに伝わり、彼女は我慢できず、怒りを露わにしたのだ。

もちろん、レーベジェフはナスターシャ・フィリポヴナの怒りを誤解している。彼は、ナスターシャも、かつての「えらい人」と同じように、自分の解釈に恐怖を感じたと信じ、今回も「哲学」の「実践的応用」が功を奏したと考えたのだろう。しかし、「はかり」の時代を嘆きながらも、儲けの欲に取りつかれ、こすからく「はかり」の時代を生き抜くレーベジェフと、ロゴジンから得た10万ルーブルを投げ捨てることのできるナスターシャでは聖書の解釈はまったく違うはずだ。何より重要なのは、聖書の言葉そのものに対する態度である。トーツキイの囲い者として生きて来たナスターシャは、おそらくはソーニャ（『罪と罰』）同様、屈辱的な地位に貶められた者ですら、救いがあると説く聖書にある種の拠りどころを求めている。聖書に拠りどころを求めているのは、レーベジェフも同じだが、その意味がまったく異なる。ナスターシャ・フィリポヴナは、全身全霊で、聖書の言葉を受け止めたが、レーベジェフは違う。聖書は彼にとって「実践的応用」を計るための実益の書である。彼を見ると、信じてもない高尙な言葉を、ひたすら商品を売るために利用する商業広告を思わせる。ここでは「自由な精神」や「純粋な心」だけでなく、「1デナリオンで1コイニクスの小麦、1デナリオンで3コイニクスの大麦」という19世紀人にとっては（現代人にとっても）意味がぼんやりとしかわからない呪文のような一節すらも、「利益」を得るために使われている。

真実と無関係な言葉の使用がいかに恐ろしいか、あるいはいかに軽薄なものであるかを示すこと、一実に単純なことであるが、これこそ、ドストエフスキイが、ムイシュキンと似て非なるレーベジェフに担わせた最大の仕事であった。そしてそのようなレーベジェフの薄っぺらな言葉が『白痴』にあふれていなければ、おそらく、読者は、ムイシュキンの使うありふれた言葉の重さを実感することはできなかつただろう。

レーベジェフは、ムイシュキンの誕生会で、「悪魔」は「時の果てるまで人類を支配してゆく」のだと語る³⁷⁾。レーベジェフの言葉は座興の言葉であるが、そこには真剣なトーンも感じられる。そう言えば、「悪魔はもう仮面なしでこの世に現れたのである³⁸⁾」(『友人との往復書簡抜萃』)と、ゴゴリも悪魔の支配について真剣に語っていた。ゴゴリは悪魔とは「傲慢なる精神」だと語っていたが、レーベジェフもまた悪魔を「精神 дух」だと指摘する。「あなたは悪魔の正体をご存知ですか。その名前をご存知ですか。名前さえ知らないで外形をお笑いになる。ヴォルテールにならって、あなた方が作りだしたその蹄だの、尻尾だの、角だのを笑うのです。なんとなれば、悪魔というものは偉大で、恐ろしい精神で、あなた方が作りだした蹄などもっていないのです」(311)。何やら彼は悪魔の「名前」を知っているかのようだ。悪魔の正体については結局、言及されずじまいであったけれど、レーベジェフがこれほど悪魔に詳しいのは、彼こそが悪魔の化身ではないのかと冷やかしてみたくなる。あるいはそれは、冷やかし以上のものになるのかもしれない(実際、自身で反キリストを自称しているのだから)。しかしながら、たとえレーベジェフが悪魔であったとしても、彼はメフィストフェレスのように、意図せずして＜聖なるもの＞に寄与する者とならざるをえない。この悪魔はこれまで見てきたように、つねに言葉を貶め、「哲学」を貶めようと希求し熱望することで、結果としていつも、何かに似て非なるものを提供してくれる。この悪魔は結局のところ、その何か―真の言葉、真の「哲学」―を考えさせる『白痴』という全体の部分の部分なのである。

【注】

- 1) *Достоевский Ф.М. Полн. соб. соч. в 30 томах. «Наука». Т.30. Л., 1975. Стр.102.* を参照（以下、本全集を『ドストエフスキイ30巻全集』と略記する）。ロシアのエリートを自任するヴェルシーロフに言わせれば、そのような苦しみを味わうのは「選ばれた者」だけで、「バカな奴」はいつも、自分の言ったことに満足している。
- 2) 『ドストエフスキイ30巻全集』第8巻、123頁。以下、『白痴』からの引用は同巻に依拠し、引用ページはアラビア数字で示す。
- 3) ただし、相手が＜子ども＞の心をもっていれば、可能である。拙稿「ドストエフスキイにおける子ども－『白痴』をめぐる」（海保大『研究報告』法文系、第53巻第1号、2008年11月、1-31頁）を参照。
- 4) Иваск Ю.П. Упоение Достоевского.- Вкн.: *Достоевский Ф. «Бесы»: Антология русской критики.* Сост., послесл., Л.И. Сараскиной. М., 1996. «Согласие», Стр.701.
- 5) ムイシュキンも、癲癇の発作直前の極度に高揚した気分にある時は例外的に、雄弁になることができる。ただしその＜高揚＞は、病理学とは別に、聖なるフルの伝統の一部としても読める（Harriet Murav, *Holy foolishness : Dostoevsky's novels the poetic of cultural critic*, Stanford University Press, Stanford, California, 1992. pp.94-95.を参照）。
- 6) 『ドストエフスキイ30巻全集』第18巻、31頁。
- 7) 同上、第24巻、305頁。
- 8) ユーリー・トゥイニャーノフ、水野忠夫訳「ドストエフスキーとゴーゴリーパロディの理論に寄せて」（水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集2』せりか書房、1982年）、161-190頁を参照。ドストエフスキイと『往復書簡拔萃』の関係はパロディという言葉によっては汲みつくせない。拙稿「ゴーゴリとドストエフスキイ－гордостьの問題をめぐる」（海上保安大学校『研究報告』法文系、第54巻第2号、2010年3月、1-24頁）を参照されたい。
- 9) 『ドストエフスキイ30巻全集』第28巻第2部、292頁。
- 10) 同上、第9巻、326頁。
- 11) ここでは取り上げないが、死を宣告されたイポリートの「思想」などもA'となる。
- 12) ギュスドルフ、笹谷満・入江和也訳『言葉』みすず書房、1969年、111頁。
- 13) Иваск Ю.П. Упоение Достоевского, стр.702. 強調は筆者のもの。以下、特別な注記がない限り、強調は筆者のもの。
- 14) 吉村善夫『ドストエフスキイ』新教出版社、1965年、150頁。
- 15) このように言うムイシュキン自身を、ナスターシャ・フィリポヴナは「赤ん坊」と呼び、自分と結婚することで、「赤ん坊」を破滅させるなんてできないと言う（142）。
- 16) 『ドストエフスキイ30巻全集』第9巻、182頁。これは、「公爵」（スタヴローギン）の言葉だが、「公爵」はシャートフにこうも言う。「キリスト教に帰依すれば、あなたは、赤ん坊焼殺といった感情をけっして受け入れはしないだろう」（同、181-182頁）。
- 17) 同上、第27巻、57頁。
- 18) Иваск Ю.П. Упоение Достоевского, стр.702.を参照。

- 19) 吉村善夫『ドストエフスキイ』、150頁を参照。
- 20) ドストエフスキイ30巻全集』第16巻、78頁。そこでは「人類にパンを運ぶ荷車」は「偉大なイデー」であるが、当面の間だけの「二義的なイデー」であると述べられている。
- 21) 草稿には、「レーベジェフ：卑下に由来 из принижения」という記述が見られる（『ドストエフスキイ30巻全集』第9巻、248頁）。バートランド・ラッセルは、「謙抑」と「卑下」を混同し、ドストエフスキイがファナティズムを誘引する「卑下」を説いたと書き記しているが、これは、明らかな誤解である（太田秀徳訳「狂信者はいかにして生まれるか」-作品社編集部編『エリック・ホッファー・ブック』作品社、2003年、79頁を参照）。
- 22) 同上、284頁。
- 23) ミハイル・バフチン、望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキイの詩学』筑摩学芸文庫、1995年、482頁。
- 24) 『ドストエフスキイ30巻全集』第9巻、254頁。
- 25) 同上、第14巻、215頁。
- 26) 同上、第27巻、57頁を参照。
- 27) 同上、第9巻、224頁。強調はドストエフスキイ。
- 28) 同上、253頁。
- 29) 『白痴』にはまた、今「死刑宣告」を受けていると感じている者として、イポリートが登場するが、ムイシュキンはその「我あり」という叫びの中にも、「魂の痙攣」を感じとる。
- 30) セルゲイ・フーデリ、糸川紘一訳『ドストエフスキイの遺産』群像社、2006年、123-125頁。
- 31) 『ドストエフスキイ30巻全集』第6巻、21頁。
- 32) 新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店、2004年、502頁。
- 33) 新谷敬三郎『『白痴』を読む』白水社、1979年、213-250頁、Harriet Murav, *Holy foolishness*, pp.88-98.を参照。
- 34) ナスターシャ・フィリポヴナが10万ルーブルの包みを暖炉の火の中に放りこんだ時も、レーベジェフは次のように叫んで暖炉にもぐりこもうとした。「足なしの病んだ妻と、13人の子どもがいますーみんな孤児で。先週、親父の葬式をだしました。飢えている者がいるんです、ナスターシャ・フィリポヴナ!!」(145)。
- 35) もちろん、職業作家であるドストエフスキイ自身もまた、言葉を駆使することで金を得ているわけで、突きつめれば、レーベジェフの言葉の問題は作家自身の問題でもある。
- 36) 江川卓『謎とき『白痴』』新潮社、1994年、53頁。
- 37) おそらくそこには、『ドストエフスキイ30巻全集』第9巻の注釈者が述べるように、『黙示録』第12章の「地と海とは禍だ。なぜなら、悪魔は自分にはもはやわずかな時しか残されていないのを知って、大きな憤激に燃えたぎりつつ、おまえたちのところに降ったからである」（新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』、878頁）という一節が踏まえられているのだろう（448頁）。
- 38) Гоголь Н.В. Полн. собр. соч. в 14 томах. Т.8. АН СССР. М.-Л., 1952. Стр. 415.